

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 高橋晃一 たかはしこういち

インド大乘仏教の思想史は、義浄(635-713)も『南海寄歸内法傳』巻一に伝えるように、中観と瑜伽の両学派がその主流を形成した。その中の瑜伽行派は、『般若経』を中心とする初期の大乘經典にもとづきながら、一方でまた、当時の伝統部派として中心的な存在であった説一切有部の教理を批判的に摂取した。これにより同派は、五事(名称・特徴(相)・分別・正智・真如)、三性(分別された性質、他に依存する性質、完成された性質)、およびアーヤ識(潜在意識)説等の独自の教理的な枠組みを提示しながら、完成された性質としての真如の獲得に向けた実践理論を構築する。この瑜伽行派の最初期の学説を集大成した論書が、紀元後4世紀には成立したと目される『瑜伽師地論』*Yogācārabhūmi*である。同論は、瑜伽行者が涅槃にいたるまでに歩む十七の段階(地)を詳説する「本地分」が前半を構成し、その後、それぞれの段階で学ぶべき主要な教理を段階別に論じる「撰決択分」が続く。同論の編纂事情は複雑であるが、一定の時間的な経過をへて、現在、サンスクリット本、チベット語訳、および漢訳に伝承されるような形(五分・百巻[漢訳])に整理されたと考えられている。

「撰決択分」の中の「菩薩地」は、五事と三性という、瑜伽行派における核心的な教理を正面から論じる。これに対して、『瑜伽師地論』の最古の層に位置する「本地分」中の第十五地「菩薩地」には、本来、内容的に「撰決択分」中の「菩薩地」と密接に対応することが期待されるにも関わらず、「五事」や「三性」の総称も解説も見られない。この点は、これまでの研究においてもある種の謎として残されてきたものであった。

本論文は、この問題に着目し、従来の研究では未解明であった、「本地分」中の「菩薩地」から「撰決択分」中の「菩薩地」への思想展開を、とくに五事と三性の両説を直接のテーマとする「真実義章」を中心に、「五事」(*pañca vastūni*)の概念を構成する*vastu*(「事」「実在」「基体」等の意)に焦点をあて、その用例と意味内容の精査を通して解明することを目的としている。

序論において著者は、関連文献のテキストの概況、先行研究の問題点および論文の意図と構成を述べたのちに、本論では、「菩薩地」(真実義品)の*vastu*に関する学説、「撰決択分」中「菩薩地」の五事説について、「菩薩地」(真実義品)の三性説について、と題する三つの章を立てる。「菩薩地」(真実義品)における*vastu*は、「色かたち」や「音声」等の言語表現の基体でありながら、厳密な意味(勝義)では言語表現し得ないものとして意味づけられる点に特色をもつ。これに対して、「撰決択分」中の「菩薩地」では、この説を踏まえた上で、*vastu*の言語表現の基体としての側面を特徴(*nimitta*「相」)、言語表現され得ない実在としての側面を真如(*tathatā*)として類別した点を明らかにする。その上で、「特

徴」と相互因果の関係にある「名称」と「分別」とのいずれもが *vastu* と呼ばれ、さらにまた、真如を対象とする無分別の「正智」がそこに加えられたときに、「五事」の体系が完成したことを詳論する。「本地分」中の「菩薩地」には、「五事」という総称は見られないものの、これら五つの術語は、いずれもその中で - ときに *vastu* の呼称をもって - 論及されていることから、「本地分」中の「菩薩地」が五事説の原型を提示する論書であることは間違いないと結論する。

このように本論文は、「撰決択分」中の「菩薩地」に初めて登場する「五事」説について、概念史的な観点から、その直接のルーツが「本地分」中の「菩薩地」にあることを明快に論じたもので、きわめて説得力がある。また、関連する「菩薩地」(真実義章)のテキストについても、入手可能なすべてのサンスクリット写本(四本)に基づいて自ら再校訂し、従来の荻原校訂本の読みを少なからず訂正したことに加えて、写本間の系統関係をも明らかにしている。ただし、「撰決択分」中の「菩薩地」における三性説に関しては、『解深密経』との関連についての論及に一定の成果は見られるものの、五事説に比して、「本地分」中の「菩薩地」との関連が明らかになったとはいえ、この点はむしろ今後の研究展望を拓く一つの端緒をもたらすものと評すべきであろう。

以上のように、本論文は、初期瑜伽行派の思想形成の一端を明らかにしたという意味での貢献度は高いと判断され、今後の瑜伽行・唯識思想研究に新たな視点と方法を提供する研究成果として十分に評価に値する。一部の解釈やテキスト校訂に再考の余地があるとはいえ、本論文がもたらした成果は大きく、博士(文学)の学位を授与するに相応しいと判定する。